義経勲功

義經勲功圖會前編巻之二

目録

鬼若乱行并剃髪改名之條

義経勲功圖會前編巻之二

伊勢三郎属牛若丸條

且説御曹子ハ美佐崎が館をのがれ出馬に被乗て落延たまひけるが夜既に明はなれぬ。暫し心を安んじ給ひ村老に路をとひたまふに前路を横山のかた室の八島志野の河関山など告奉つる。抑も志す方へ来まし。播次にて室乃八島にて待といひしかども本道を行ば美佐崎が追人に逼られても面倒なり。紀みちを行ばやとて郷民に案内をとひ隅田川邊を東へ赴き。いそぎ跪を路に二日路をたゞ一日に馳給ひ。上野國板鼻といふ所に着たまふ。既に其日も西山に没し。前路暗く。原来不知案内なるあまりに。其所此所と呻ひたまひ。乗給ふ馬も疲るゝ躰なれ共[illegible]苦しく饑にさへ臨み給へば。身躰気力なく大いに困みたまふ[illegible]

一村しげる杜乃奥に一点の燈火幽にみえけれバ扨ハ人家有と嬉しく思召。立倚て見給ふに。あやしの萱屋あり。年久しく住荒したるとみえたり。木立物ふりて苔に埋れ柴乃編扉格子も朽ちていと寂寞げなり。頻て駒寄下立て。是ハ行暮たる旅人なるが路に迷ひ宿を需るに難渋に及ひぬ。苦しからずハ一夜を明させ給へと言入給ふに。主と覚しく二十許の女乃声にて。障子乃影より。安き御事なれども。主ハ宿に侍らず。今夜更てや帰りぬらん。人に勝れて情ある者にハ候へど。留め参らせ却て何なる辛き目を見せ奉らんも量りがたく候ず。よしなき所に宿りたまハんより。他乃家を御頼みなされとぞ答へける。御曹子再仰けるハ。よしや夫も苦しからず。家主の御帰宅有て。兎角仰あらむ。其時何方へも出立ん。今宵一夜ハ明させ給へ。色をも香をも知人ぞしるとて。馬を外の方に繋ぎ置き

遠侍へはしり入て坐しまふに。女ハ此御言葉にや愧たりけん。実や一樹の蔭に宿り。一河の流を汲も一世ならぬ事と承りぬ。奉見まで未御年の程も若くみえ給ふに。さりぬ旅路に迷ひ玉ひけんも痛はし。其処ハ余り見苦しくハ何処にても簾の住居坊嫌ハへども此方へとて。一間へ請し種々の菓酒飯など。信しく持出て参らせけれど。太郎に悦び玉ひ。暫く謝しまで十分に喫りのみ給ひ。女やりけるハ此家乃主ハ世に勝れたる而音あてハへど。相搆て見付られのよふ灯を消障子を引立て忍ばせへ八声乃鶏啼侍らハ起し参らせあんと。細に言て奥乃方に入りける。御曹子思召けるハ彼女を如何なる男持てか。是程に憚りなん察もするに家主ハ山賊強盗の徒ならめ。何許の事かあらん。よし無礼を働かむ。何の為に佩たる太刀ぞ。金味見せてくれんず物と。三寸許抜かけて膝の下にしき消せよと言し燈を殊に明くかゝげよ

伊勢の三郎牛若君に属する圖

とさし障子廣く引開直垂の袖が顔に押當て。空睡して窺ひゐたり。暫て其夜も四更と覺しき頃表の板戸荒らかに押開て入来る者あり。須波主の男よと。直垂の下よりさし覗ば見て年齢三十四五許なる男。身の丈六尺余なるが。芦の葉染し直垂に萌黄威の腹巻ざし長き太刀を横帯。右手に手鉾提左手に振火揮照して入来るに後に續て同じ程の若者四五人或ハ猪の目彫たる大鉞或ハ薙鎌棒長刀亦ハ弓箭服狭く。胡簶負ながら唯今事に逢たるよと見えて眼が瞋り息つき荒く打入て。母屋の簀子に立蹲りさながら荒木造の四天王とも謂べし。何さま弱き女が懼るも理なりと。尚も空睡して窺ふに先の男一間に人在と見て。大眼が光らし白眼廻して宗々ら裡へいりぬ。如何なる事をかいふらんと。壁に耳が當て聞すに。彼男悪さげなる声して。やよくとあらけなく呼起すに稍有て寐おれし

き声して。唯今歸りたまひしやといふに。男主が謂ふ一間に居るは如何なる者ぞと咎むに女答て。さんは不知旅客なるが来訓ぬ路に日も暮て行方ハ遠し一夜の宿と宜へども。良人の留主なれバ叶ぬよしやせども。色も香も知人ぞなると仰て默止がたく見えさせたまふ其御詞の恥しさに一夜の宿を参らせぬ。若き女人の事今宵一夜を何か苦しかるべき。曲て此宿を参らせ給へとぞいひける。男呵々と打わらひ。おことハかゝる扁鄙の人なりけれバ。むくつけき人とのミ思ひ慢しに色も香も知人ぞなるとの詞に愧て宿参らせしとや。あら艶しや今宵一夜ハ何か苦しかるべきとぞいひける。御曹子心中に感じ給ひ荒夷にも似気なく情ある者かな。悪きげなる事をやさしとて太刀の錆になさんずをの我命冥加にさへかなひけるよと微笑しつゝ猶も耳が清して聞給へバ。彼男の聲にて。客人の辭が合んるに遠くもた

五日近くぞ三日の内に又〻逢玉ひしと忍べるゝ。是も今も日頃の珍事に逢ひ更常の習ひなり。彼酒為らせよとて。女の童に蒲団抱せ妻が先にたちて一間へ入来り客人へくと呼ぬ。御曹子も眼覚ける面色しく座が設かへ玉ふに主の男礼がなし。婢嫌茅屋に一夜が明し玉ふ更に心苦しく思ひ侍らん彼看も何なくとも一盞が傾け旅窮が拂しひ玉へかしとそ申ける。御曹子其厚志が謝しあひ酒を嗜ことハ好ずとてきこしめさず。主の男中〻に知らぬ宿なれど心がとゞめしものらぬも理り去ながら貴こそ怪しの男にくはへども其斯く侍らんハ。如何なるお事ハとも心が労どもの下に及ばず。安意く一盞がきこしめされかしと宿直申侍ひらんとて表に向ひ如何に者ども疾来よと呼ハ坐ぞ。始主に従ひし男。五六人出来りぬ。主が曰。今宵ハ客人が請じたり。汝用心有と見ゆ。汝等ハ不寐宿直仕れよ。粧しき者来あらば即時に斬て捨よと命じ侍りぬ。若者ども領掌して表へ出ぬ。主撥立て。亭の蔀押上燈臺両所に燈し立弓押張箙束解てならべ太刀膝の下に置犬の声風の音にも心が賊く守護せる体。そのさまいしく見へ侍りぬ。御曹子も其志が感じ給ひ酒滴許用ひ給ひこれ彼の物語ありけるに主の男申けるハ。斯知己になり参らせける上ハ隠し申さず。御名が顕させ玉ひ。此近國の人が尋ね玉ふぞあらずや。案内しくまゐらせんと。実意面に溢申にぞ。御曹子も始より此者の体が窺ひ玉ふに相貌堂〻と威風凛〻として。顔たましひ凡庸ならず。前に日落者など言しが思ひ合せぞ。由緒有者の零落して郷取採せるならんと。侍ど彼熊阪が徒して支遠ひ。仁義乃端が知弁へし者と見へ侍ぞ。実ハ我が言受せ更に上かくへ郎黨に召使人物と思惟ありひ作るハ世に深く包ぬなぐ王の芳志の嬉しさに名

兼ねて構へ人々も偏しかりけるにて。是も平治の乱に亡び失せし。左馬頭義朝が末子に牛若とて。幼く鞍馬に登り出家得道なさしめんとしが。聊所存有て鞍馬を忍び出奥州へ赴きしなり。今の名を左馬九郎義経となりしとぞ曰ける。主の男是を聞て大に驚き。俄に席を退き志ざり。低頭平身して荒涙を流し。須臾ものも不得言有けるが。稍有て鼻をかみ思ひなすずや問ふらずずハ争かなり。まる世に恐有なから我がるに八重代の主君にて有人はぞや。斯申さんにて其不審は尤し。原来某が父を。伊勢国二見能連と申て。大神宮の神職にてありけるが一年九條上人と門船住ありしが。明華の後言に依て咎ありて。伊豆国長島といふ所へ流されき。年月をふしに配所の徒然を慰んと妻を迎へひしに程なく。懐妊仕て七月と申に父ハ不圖病死仕りぬ。其後母ハ某を胎子ながら。母方の叔の方に養育せられ漸く安産し伯父の懐にて某を生し立。某成長に従ひ父を如何なる人と問ひに母涙ながらに物語りし。扨て父を伊勢能連と義を名乗れり。某も伊勢三郎能盛と名乗ハ母平素申けるハ汝が父能連ハ頭殿と主臣の約をなしつ。大恩を蒙りたり。源家の恩を忘却なかせそと教訓仕まりし故。天晴源家の公達に随逐し。粉骨砕身しても恩恵を報しなんと思へども。悪しきに平治の乱の後ハ平家の一門權柄を掌握し。源氏の公達ハ或ハ討れ或ハ竄されて。散々に成りて其中我なく無念乃光陰を送りしに。家の粟を食しとてに心にもなき切取強盗をなして。今日迄露命を保ひしに三世の奇縁空ずして。君不斗も當屋に宿らせ給ひ此名を承る事。年来の望み此上やは世に是偏に八幡大菩薩摩利支尊天の頭を借りしなりて候ものを。嬉し涙にくれにけり。御曹子も大きに

御最後なり。人甲斐もなき今の身なれも名乗あへで主従と成りなく
事の不側さよ。是も家の滅亡を無念に思ひ。何卒大義を思ひ立
驕る平家を伐亡し源氏の世となさばやとこそ奥秀衡を頼みて下
りしに。深栖光重及び三條橘次に事顕はれ熊坂が討。美佐崎
が斬りし是迄落延来りし迄。落もなく詫みたまはんとす。三郎夫婦その
膽略勇敢を感しなり。改て主従の御觴を賜り諱の一字を頂戴し
て是より能盛を義盛として改めける。去程に長物語に其夜も明渡り
たりけれ。御曹子は橘二が事気遣しとて立出んと気色ありけれ
義盛妻に向ひ千金の御身を独り旅路に赴かせまゐらせんやうなし。某
も若者として俱に奥州迄送りまゐらせん。和殿には我郎党をして留守
を守明年の春を待べし。其頃も遁れた。何方へなりとも再会
縁は武士のならひ命を君になせよ再会の期も量がたし

なりまだ妻を伏沈む。夜物の旅だちに主の留守は物憂に是を永き別
れとなるべしと思ふ神ならぬ身乃思ひきや。願くは奥とやらん迄も
俱して下されましと泣たまふ。義盛気色損じ浩る大義を抱へる君の
御供して秀衡が方へ到らん身の義盛なんぞ恩愛の契を捨ずして
妻を具して下るよし奥乃武士に指さされんや。其義ならずは永
く離別せんいざやそと眼を怒らし叱りければ。妻も大に驚き。前に手
せしを妾が誤なり。必ず御供申まし。宥させたまへと赤面して泣
伏ければ義盛漸く色を和らげ。跡の事ども何是と託し。剛の者乃
癖として引も返さぬ梓弓。唯一筋に思ひ切り御曹子の御供し。住馴し
故郷を跡になしてぞ出行けり

牛若丸秀衡に對面 并 六韜三略之傳

御曹子は当国へ下り義盛を得給ひ。御旅の斜ならず。足柄を立て鈎が

牛若丸初て秀衡に對面の圖

宮城野の原榴岡。千賀塩竈籬が島。都の土産にと緑下らん。安
根羽の松をもよそにみなして。栗原寺にぞ着たりける。播二鈴て別當
の坊へ入たり。躬は平泉に馳到て秀衡に謁しける。ハ兼て府中
あまし源氏の公達左馬頭義朝公の御末子遮那王殿。数年鞍馬に
在しが勧なりしが。當國迄御供申ハ尾張の大宮司季範が許にて御首
服あり。今の御名ハ源九郎義経公と申なり。栗原寺の別當の坊に
入まりけれバ。急ぎ御迎ひを参らせ玉へとぞ申ける。須日秀衡ハ風邪に
犯されて病床に臥居まししが。大に悦び嫡子西城戸太郎國衡。二男伊
達冠者泰衡を呼て申けるハ。昔眺夜霊鳩一羽家内へ飛入と夢見たり
何様吉瑞あらんと思しが。果して播二末治が働にて源家の公達當
家を頼て遥々との御下向して来りあるは。恐多も此君ハ清和天皇の御
末左典厩の八男にわたらせ玉ふぞ。早く御迎に参れと命じ玉ひ。國
衡泰衡ハ其日一際美麗に鎧し兵三百五十騎を随へ。栗原寺へぞ馳
参りけるが。其跡にて秀衡ハ病中ながら手足を清め烏帽子取て寺
設り直垂を着かけ。且近臣をめし倚廊宅を拂ひ庭の落葉拾ひ
草引など指揮し。今や遅しとお待まゐる。心遣を殊勝なり。國衡
泰衡ハ栗原寺へ馳到り。御迎ひ申上まいらせ。御曹子御喜悦限なく両
將に案内させ玉ひ栗原寺を立て平泉の城へ参り玉ふ。別當の坊が
九衆徒五十人を添へ御案内の為御供させたまりぬ。程なく平泉に着
玉へしかバ秀衡出迎て上段の間に請したり。先御人品を見奉るに
前に花如き美男にて。然も武毅才略面に顕れ自然と大將軍の器
量具足しあへども。感激の余まで涙を流し。低頭平身してやさしきなるハ
秀衡が偏鄙の鬼にも不思召。千金の御身の遥々と御下向ひまみへ奈
さよ実則くは上ハ愚息とも八ヶ小及ず奥羽両國の大小名三百五六十

人御幕下に随遂させ守護なし奉らん。假令ば清盛日本中の勢を盡して攻来りとも。微塵に擊摧ん事何の難事かあらん。今日よりハ於
が泰山の安きに置時節を待て大義の御旗を飜させ給へと。家□に言上せられけれバ。御曹子も肯て懇志を謝し。偏に萬事秀衡を頼思召よし仰ありける。秀衡領掌し。扨國衡安衡及び郎黨共に對ひ。君此度當國へ御下向有し事偏に橘次末春の老覚に倚ぞ。秀衡が秀衡と思ハん者ハ。橘次に引出物せよとぞ申されける。依て嫡子國衡白皮百枚鷲の羽百尻。乗馬千疋白鞍置てぞ引たりける。是に劣ず二男安衡も。砂金の引出物を与へたりけり。其余の一族郎黨我もくと引出物をてける程に。橘次が身をも埋る如くに積重たり。秀衡是を見て打笑ひ鹿の皮鷲の羽絹布太刀刀も今ハよも不足あらじ。吾も京辺り好む所の引出物せんと貝揩したる唐櫃の蓋に砂金一蓋いてぞ取せける。橘次ハ余の嬉さに。將に是貨の山に入し心地し此度君の御供せずんバ赤坂の驛にて熊坂が為に貨物を奪ハれ命を失ハんに。其難を避今亦斯莫大の引出物を得事の嬉しさよ。是偏に鞍馬山の多門天の御利益ならんと。深く信仰し。秀衡父子に拜謝し。平泉を辞て夫より交易の事をなし果亦も都へ登りけり。斯て御曹子ハ秀衡と旦暮大義の商議有しが秀衡老功の人にて。因勢を察ること。いまだ時節到来せずして。急に兵馬を動す可き時ならずと。御曹子をも秀衡の子息共と弓馬の術を励て学ばせ給ふ。就中奥州ハ良馬を産する事其頃天下随一なれバ。只管馬術を鍛錬あるに。天性の奇才なれバ遂に其妙所にいたり。今ハ高岸に飛上り。深淵を躍越なんど其事心の侭ならざりし。國人共其堪能を見聞して。驚嘆せずといふ者なし。御曹子亦思召けるハ吾既に剣を振弓を弾て敵を討事まで恐らくハ天下に右に出

者有まし。然と雖ども衆心が察し。百勢が絶しくて。籌を帷幕の裡に囲らし。勝を千里の外に決する術陣法変化の法が不知。何ぞ良師が得く。兵学に通ぜざるやと秀衡に此義が宜べし。則一族佐藤庄司元治が師範にまりぬ。御曹子大いに悦び給ひ。是より戦場の進退陣列の変化が寝食が忘く学究めらる。元治其智才が感嘆し君が英の俊傑なり。中く某らが短才が以て。教導しまゐらん事不能とて。毎度辞退の色ありけれど。御曹子曽て許し給はず。益師弟の礼があつくし勧学有しが。一時元治に向ひ。足下は此類なき兵道の達人なるが。従隣国に足下の如き士有やと問給ふに。元治微笑し。某等が如き未熟短才なる者まで。斗が以て量車に積で籌ふ程あり。云ながら須彼御大事に及んで何斗の役にか立ん。聞に兼る部に吉岡鬼一といふ諸家の書籍に通じ。公の御見出に須ひ。且六流に

ゆ秘書が朝庭より預り奉りし。是亦や当時兵道の達人なりと世に聞えまさしと語り進む。御曹子嗟嘆し給ひ我あれば在るべから鞍馬の山中にて成長し師の膝下にのみ在りしかば。さる者在るも不知き。是や誠に燈台下暗といへる類ならめ。そもそも六韜三略と如何なる書にやと問給ふに。元治が曰其なんどの東夷争うさる秘書が知り給ふ伝来るまで。往昔人皇六十代醍醐天皇の御宇。延長元年癸未夏五月。春宮文学が好ませ給ふ右の左大将宰相大江惟時に詔し。儒書及び聖経賢伝兵書が請来せよとて砂金千萬両が賜まく入唐させしめ給ふ。惟時勅が奉じ万里の波涛が凌ぎ異域に渡海し。先五萬金が唐朝の王に照宗帝に献じ五萬金を龍顔将軍に進じ。儒書兵書が悉く需得し。魚言語殊に偏にして其義通ぜざるしかば延長元年より承平の頃迄凡六年に明に細に学ぶ。経三史文撰に通ず。其成功によりて

亦軍書武經の昔を語り。曾て六韜三略の巻を得られ。又軍歌の
周公乃八四十二箇城の秘法陣制八十一變。順逆六八變天門の秘傳乃
諸葛孔明八奇正進退の變。禹化の傳。規都て武家の兵書三十余部
是皆太公望が立し所の。覇者の傳ふして。張子房が黄石公より授かり
給ひし秘書なりとかや。其後呉越の王元攝闔乃恵宗延ふ傳りて
九經が西湯朱雀院の承平四年甲午毎手ふ飯朝せり。帝殊ふ御感
有て。吾朝の寶是ふ不如。武臣ふ傳よとて。其書を撰ハせられ。御
先祖左馬頭満仲朝臣ふ下して。智仁勇を兼備し。通天地將の理ふ明か
成名將なりとて。大江惟時ふ詔し。八幡宮の寶前ふ於て傳へらる
然しより則神樂を奏し。青白の幣を立て。神授の印とし。中央ふ
黄石公左の方ふ居。大公望右の方ふ八張良が下邳進履の圖を
是本来武家の全体秘授なりとぞ。惟時

ひ纏帛の中より並を取出し十有八変しくて是を授く。満仲公齋して玉ふ
事三日三夜ふして是を受玉ふ。然ども漢本なれバ。文義精微ふし
て。趣く讀明むる事能ざりしかバ。和字ふ改國字を以て書授ら
れしふぞ。文義燦然として通ぜずといふ事なし。号て訓閲集と謂
しとかや。其後星霜推移て。大江雅匡此書ふ通達しありしふ。其頃八
幡太郎義家公當国乃兇徒を征せんとて下り玉へども。賊軍強て度々
敗しありしかバ都へ引返し。彼兵書相傳乃義を願ありしふ則勅
命下りて殿上ふて雅匡卿ふ講ぜさせらる。八幡殿是を階下ふ立て
聴聞あり。忽ち其旨を悟て。再度當国へ御下向有て遂ふ兇徒を亡
しつひぬとか其後ハ彼書を代々の帝の御宝藏ふ秘置て。敢て他見
を許し玉ハざりしふ。當時吉岡鬼一文武の才ふ長せしと有て。彼秘書
を預置せ玉ふより承りぬと語りまさで。御曹子大ふ感心ましまして心中

に八我満仲義家にハ不及と雖如何にもして都へ登り鬼一が方に身を
倚其書を懇望して一見せる事を得ば怨敵たる平家を亡さん事掌
の裡に有。鬼一をして許容せさせんが一太刀に切害しても奪取んものと思召
是より唯都へ登ん事をのみ思召けれども秀衡に告たまへバ自然都へ聞え
なバ吉岡が用心せんも圖りがたしとて心中深く秘し。秀衡父子にも告
たまハず假初の遊行の如くにて平泉を立出密に都をさしてぞ忍びたまひけり
去程に平泉にハ翌日まで御曹子の見えたまハねバ頓驚き八方へ手配して
尋ねまゐらすれども不知れ。詮方なくて止にけり

吉岡鬼一法眼が事

斯て御曹子ハ平泉を忍出駒に任せて馳玉ふ程に日を経て足柄なる
義盛が許に着たまふ三郎夫婦大に驚き何の為来りたまへるぞと問
ふに兵書懇望の為都へ登よし仰けれバ然らバ御供申さん
によりて是より義盛を御供にて東山道へかゝり路次なまきで信濃なる
木曽義仲が許に立倚たまひ始て御對面あり。大義の謀を仰合させ是
より義盛にハ御暇玉ひ五六日の逗留有て亦匹馬にて都へ忍び上り其
頃聖門房ハ山科に住居して有しかバ茲に身を隠して聖門房と謀を合
し専ら便を需て吉岡が方へ住込ん事を計たまふに一心の凝ところ金石
猶徹のならひ終に所縁をもとめ。吉岡が方の学僕とぞ成たまひける抑此
吉岡鬼一とやハ伊豫国吉岡の産にて童名を鬼一と呼天性武技を好
亦諸書に通じ。諸道の奥秘不究といふ事なく。希代の博士成けるを
宇治の関白頼長公諸太夫式部大輔盛憲が所縁によりて此身近く召
き常に鬼一〳〵と呼給ひて其智才を愛玉ふ程に鬼一ますく出精して勤
仕せしかバ。御心に合ひ追て出頭して吉岡法眼憲海と名乗宇治殿の
御博士となりしが遂に其学才天聴に達し。宇治殿へ勅望有て公の

武略の師となされ。六韜三略の兵書を預させ玉ひぬゆゑに法眼が威勢天下に轟き。貴戚権門の公達も皆法眼が門下に業を学ぶのみならず賄賂の使者門前に市をなし。自然家富栄へ。上今宮通今出川に邸地を賜はりて良工に命じて花麗の亭宅を構へ。四面に深き堀を湛へ。三ケ所に橋を渡し。門扉堅固に営み。夜は橋を引て猥に人の出入を許さず。さながら城郭のごとく。高貴の御殿造に等しく。栄耀栄花に飽世を心のまゝに暮したり。然るに鬼一牛若君を弟子となして兵道を教授するに。一を聞て百を察さるゝの濶達度量あれば。駭然として。此若君は人中の龍とも謂つべし。何さま成功の日を俟ば天下に聞る博識とも成らめと懇に教導したりけり。されども彼秘書をば石櫃に納め深く秘蔵しければ。御曹子も如何ともすべきやうなく。心を苦しめおもひし一夜月の隈なきに館の泉栽を其所此所と逍遥しありきしが

物好をつくし。泉水築山樹木草花の植ざまも。名山勝地の摸様を寫し目もあやに造なせしかバ。御曹子殆ど興に入たまひ。ゆくりもなくて奥深く潜り行たまふに。一際風流に造なる亭に女の琵琶弾て今様を唱ふ声聞たり。御曹子耳を欹たまひ。元来法眼に八二男三女有て男子ハ平家へ勤仕し。女子ハ夫々に嫁して。末の娘のみ家に残留りしかども。未だ垣間見し事なし。察するに彼撥音ぞ其末女ならめ。如何成姿ならんと思より。透垣の間よりさし覗たまへば。年齢十五六頃なるひとく嬌面玉の如く。緑の黛的歴に花の唇愛敬づき。身には羅綾錦繍を重着て。長なる髪の飾も奇麗くしく。十分に粧を凝し人在ともおぼえずあり解たるさまは。上界の天津乙女月中の嫦娥も斯やと思はるばかりなく。彼矢矧の浄瑠璃にハ赤道に上りし佳人なりとも。好色の御曹子。傍目もせず見惚たまひ天晴法眼が深閨に寵育して寵愛しけるも理

牛若君鬼一が娘に私通して秘書を見るの圖

よ。何卒此女に言より一夜の枕をもかハさばやと思召ども。流石うちいだし得
にも言ひ給ひ。恍惚としく躬の部屋へ帰りたまひしが。其よりハ唯夢にも
現にも。彼人の面影のミ立そひて。露忘るゝ隙なく。余乃事に堪兼玉
ひ。法眼が身近く召使。幸壽といへる侍女が潜に招きたまひ仰らるゝ。口外
すべからず面なき事ながら。和御前が信有人と見えけれ。頼もしき事あるまじ
奈何に許諾てんやと曰ぞ。女微笑。殺なさぬ身にいへるも妾が力に及ばん
程の事を頼まゐらせんと。苦るぞ。御曹子嬉しく思召仰らるゝハ
吾頃日館乃姫君が垣間見てより。夢現にも面影の忘がたく。斯て空
しく戀死ん命が。一度の逢瀬にかへばやと思ども。心のたけだに聞えん知
るよしもなき便なし。生て世々の情にハ此身此事が姫君に告玉りなば。法
も一のむ夜乃間の露と消るとも。千萬部の経陀羅尼にも勝まさる
後世の苦患も免なんと。倶に口説たまへば幸壽大いに

是ハ思ひかけざる事が。宜なる彼御方こそ主の分て寵愛しのふ姫君にて
高貴の御方より種々婚儀が申入のえども。中々取敢たまハぬ程の御事
なれバ。増て密通なんど思もよらず。斯る事の物語がも申玉ハゞ姦
ら命ハやや返もなく。法身迄も如何なる珍事にか逢なん。此議ハ不通
と思止まへと。氣色が変て辞るが。牛若君ハ猶もひき口説たまひに
も言如く。逆も消なき玉緒なれバよし一夜の情ありて不叶ハ師の聴
に違し。姫が縁の事とし。刑罪に行まハ其も本懐よ。刃の下に
朽てもれ。和御前ら各も露程も顕ざしと。宴に余義なく頼まへバ。幸壽
も今ハや如くあまりし。左程迄に思召バ一度の文使なし進せん。御返事なし
とてこれ再度まで許しまへとぞ申ける。御曹子大に悦ぞ。かひ。案て思の
たけが書認し艶書取りし。必ず首尾御返事が……せよとて渡し
玉ふ。幸壽ハ御文が懐に押隠し座が立。其夜姫が亭へいそりける

折しも長月半過頃ふて。姫ハ南殿の簾巻上させ机ふ倚らせ。庭の景
色を眺居く。女の童二人なうで外ふ人もなかりけきバ。よき折よとて傍
ふ座し。疾ふも不得言。四方八方の物語なんどもちろふ。姫も打興じ言ひ
なるハ。折節の移変る中ふも古より春秋ハ殊ふ勝て。詩ふも歌
ふもよみうく賞したまさど。一れ秋ハ憐ふく。千草の中ふも。菊女郎花
なんどの因が得良ふ咲乱き。萩の下葉の色附て。露重けふなやめるふ
秋風乃吹通るも可笑玲瓏なる月影ふ三越乃鴈の渡る音し薄
尾花が下小。種々の虫乃声しきさるも身ふしみて。春よりも興有とぞ
語りなる。幸壽も女童が眠なるを幸よとて尚も語ふ花を咲せ。実
作まなることく。物乃哀も秋ぞ勝まさると侍し如く。萬ふ附て秋わどし
面白き折ハ侍さど。琵琶笛なども音も秋乃夜なども一れ澄勝る物
ふく。此程御琵琶遊しる我館の御弟子の若人御秤が

聞とめ潜ふ垣間見て。現心なく戀なまり。今ハ病の床ふ臥侍しが。せめて
斯乃思出ふと書認さる文が妾ふ預し。一度御目ふかけてよと。頼ま
えぬ節なれバ是よと思侍まさども今まだ若き人乃。死なんとて迷惑思ふて乃
見捨からい。是非持参まりぬへふ。女性も五障の罪深きよし御佛も
説あへしとう。後世の障が成ふ為と思召。御手ふよ觸させあへて給
より御曹子の艶書が取出しさきし置なれど。姫も思ハず顔お赤め
答もなくさし俯首て在せしが。幸壽尚捶く諫し。なれど流石哀と
思ひて。文とり上て閲見ふ。手跡の妙なる而已なうん。心詞も優ふ艶
しく書流し給ひしかも。其人品の床しく。面影立添心地して。操返し
読くなかめ増らす思面色なまさで。幸壽お赤の色ふ。彼若人を
容貌風姿乃勝るのくなかす。智ある人ふ秀て主の殿も他なうす寵
士だせられぬ萬乃業ふ心得し中ふも殊ふ笛吹事ふ妙ふして深[illegible]

然も耻せるばかりに侍まさん。他所ながら聞せ玉はずやとそゝのかし玉ふに

兎も角もとのみ答ゆるにぞ。幸壽は仕済たりと、其夜を己が局へ

帰り。御曹子を招きまゐらせ、急くの吏なれど、望の夜彼所に到り、籬の下に

て笛吹すへと進まゐらば、将に是月下翁の赤縄を結びあはするめでたし。御曹

子は飛立ばかり嬉しくのたまひ、其夜は打も寝玉はず。東雲を待明し、暮安き秋

の日も今日は三秋の思をなしたまふに、兎角して時刻にも成られば、隙を窺ひ

しく姿を潜び、潜に忍寄。幸壽が言し如く、籬の此方に停て、年来手馴

させ玉ひし一葉の調取出し、想夫恋の曲を細々と吹澄しぬるに、二なき上手にて

ましませば、其音清雅にして怨がごとく訴が如く、恋情の哀を述るも妙音にやあらん

なりけん、諸声を止て鳴止むも、いとゞ音色で勝なる。姫も此調に心をうばれ

簾の隙よりさし覗玉へば、月いと明く衣の色さへ的歴にみえさせ玉ふ。御身には

て白綾の小袖を着重ね、顕文紗の直垂に白き太刀をはき、薄化粧

に鉄漿黒く、眉位高く造なし、笛吹てぞ停玉ふは、さながら山陰中納言在五中

将の童もかくやと思はれ、許なきまで顔の紅葉を照そへ、胸打さはぎ

許く同じ心を通せたやと、箏琴を搔取て同く想夫恋を弾

給まへば、互の意相和して、或は別き、或は合し、呂律則を不越、私語が如

に異ならず。幸壽も殆ど心耳を清し、吾を忘て聞入しが、稍心づきぬ。さ

ては何時を期しあはんぞと、折戸推開て立出て、御曹子の御手を執、思の丈

を申し上ければ、其身を外の方へ走り出にけり。御曹子は今さらに

胸躍膝慄ども、心弱くてはかなく恋ひもあへず、姫を高吏まゐらせん。人にも

や知られんと声も出ず伏居たるが、遂に井出の下帯解初て

うしぬ契をかはしたまひけり

牛若丸見潜秘書条

九郎御曹子は法眼が娘に契初たまひてより、人目の関を忍び通路の役

㒵重孫比目のごとくハ深くなりなんと思ひしが吃と心に思ひ定めつゝ。吾[illegible]
乃大志を抱かば。今女色に耽りて空しく光陰を送るべき。天地神明の冥覧
亡父亡兄の情も恐ろし。當家に膝を屈するハ。唯彼六韜の秘書を閲せん
為なるぞ。姫が頼みし本意を達し。序時も早く義旗を飜さんものと
思召一夜姫に向ひ作るゝぞ极も宿世さる奇縁にや。唯假初に契り
まゐらせしに。哀なる心をさへ聞えぬ。九十九髪のまうけに契り侍るも
兄が。吾此館に勤学せる事。元来一箇の望ありてぞ。夫ハ余の義にあらず
當家天朝より預かる六韜の秘書を一見せんとの為なるぞ。師匠深
秘しまひければ。未だ是を許されず。御身実に吾を思ひ玉ハヾ。何卒其書乃
在所を尋ね。一見を許すべし。然ば吾實名を顕し。王権乃八千代迄も
乃栄を変ぜし。実余義なくぞ作りし。姫大きに驚き。是ハ大方ならぬ
御望かな。彼秘書ハ公乃御宝にして。父君にも私に見る事能はず

石櫃に收て深く秘しまへり。其在所委しく知人なし。此事ハ時節
も候ハゞとくとく願ひもせん。御曹子尚も姫が心を蕩し。秘書を閲
せんものと益契を深くし。艶言を専らにして。度々所望有しかバ。姫もさのみとて
辞むに由なく。潜に庫中に伴ひ石櫃を開きて素書十六巻を見せ奉りけ
れば。天に拝し地に拝して悦びの余り。是より夜毎姫が亭に忍びて。十六夜
にして十六巻の素書を一字も残らず写取たまひける。然るに主法眼も斯
る事とハ夢にも不知。御曹子が姫の方に通ふ由を聞て。大に怒り切て
捨ばやと思へども。別て寵愛の姫が心入なれバ。表に害せず。姫が身に
変ありし事を怖れ。不知人を討て捨ばやと思ひ。其身既に年老て
行歩意に任せずといへども。且陰陽道を修して道の説にも躬人を
殺害せる事を忌。天晴心利たる者もがなと。時に彼若者を討せなん
と尋ねらる。其人物を需けり。兹に其頃北白河に湛海房といふ者有

兼て吉岡が門弟と成て。兵術に委しく凡上五十人の力有て人を殺事虫を殺がごとく。然も心姦悪にして淫酒に荒み。仕官も心ならずして主をもたざりけり。意の侭に振舞ける。是も法眼が姫を見染し。吉岡の聟となりて。其業をも継天朝の御師範ともならんと。法眼に阿諛たりしに。御曹子と姫と私通有由を聞て。湛海忽ち心火盛んに燃嫉妬の思ひに胸を焦し。如何にもして鬼一を失なはやと思ひ。法眼に見侫舌を翻して種々と讒じけれども。法眼渡に船を得たる心地して言るは余に物を案じ過して。御辺の在事を忘られり。吾も頃日きやつが不義の趣を聞て安からず。討て捨ばやと思へども陰陽道のならひ穢人を斬事能はず。今日迄黙止たり。御辺今宵五條の天神に待伏して鬼一を斬て捨よ。鬼一が首を持参らば。年来御辺が懇望有素書を傳授してんと言ければ。湛海雀躍して大に悦び。世に幸も

多年の。斬る事すてなく礼憎しと思ふ童を切て恋路の遺恨を晴すさへ有に六韜の秘書を授られてこそ満足なれと一義にも及ばず領掌しぬ。法眼亦曰鬼一が為躰をかんがふに眼ざし不凡。剱法をも心得らうとみえて常に黄金造の太刀を佩て身を不放必ず慢て不覚をな取そと誡まで。湛海巨口を開て呵々と笑ひ某秘術を振はゞ天魔鬼神なりとも。手並にも侮しれハど。況や彼程の小童一太刀にハよも足ハじ酒を温て待の。御首にハ鬼一が生首を進せんと飽迄大言し。頓て宿所へ馳帰り。心得たる己が門弟五六人をかたらひ暮を遅しと待居たり法眼ハ。謀成就せりと獨笑し。御曹子招寄けれど。牛若君ハ何事やらんと法眼が居間に到りたまへバ。素絹の衣に袈裟かけて経机の上に小法華経五六巻置て一の巻を開て讀誦し居たり。御曹子ちかく座して何事のおハすと問たまへバ。法眼経机を押やり。御曹子を近く招き御耳に

頼度一義あり。其子細ハ吾老門弟ニ湛海といふ者あり。無て天朝より
預奉る所の秘書を懇望して不已。さりども私ニ傳授せざる書ニ
何しざりバ其事を左右ニよせて辞しニ彼深く遺恨ニ思ひ吾が失ハ
ても彼書を得んと其謀既ニ頬なりよし。吾曾て彼が怖るゝニあら
ざりど陰陽道の疑ニ人が害さるゝ事を誡まざ吾手を下さし
御辺を若年と雖戈略衆ニ秀られえ謀を回し。彼を討取て吾心腹
の患を拂ひ得させバ然らざ其功かめでく。六韜の巻を傳授せんと
欺りしざ御曹子心中可笑其書をもや吾肺肝ニ染るものを
が今吾ニ命ざる所も都て偽ニて。姫と私通せしを腹黒ニ思ひ吾
を坂地ニ陥んとの巧ミなりめ憎さも憎し湛海が首を斬て鼻明せ
んと笑を含ミ玉ひ何事にやと思ひ侍しニ最安き御事りが
安りし其者の髭首取て御目ニかけバりん然し渠が何国ニて

いふさらや。法眼點首渠此節五條の天神へ參詣をるよしなりざ。今宵
天神ニ待請て討バとて指揮しる。御曹子心得ぃとて退き給姫ら
許へ到て其今夜五條の天神へ參りの事ニ寄で悉く見へまいらせず
いへざ。御暇乞乃ため參いと作るニ姫ガ強き天神へて何のさめニ參を
のふぞと問さまざまよ師の高弟ニ湛海とや人有とぞや。彼者深く師
を恐恨てあやらく冦せんと巧めまざ何卒彼を討て得させよとの作り
より共夜五條の天神ニて。彼と雌雄を決せんさめ參まるなり。勝負乃
習ひ不運ニて渠がさめニ討まるあざ今を限の對面なるめと打志をれて
曰ざ姫をよくと法伏。難面乃父の心ろお君ニ曰し事ハ皆空言ニて逆つて
君を湛海ニ討せんとの事なるめ。今日の昼湛海来り。酒たんと酒ざてお
め中らニ打語らひのまひしニ一太刀ニハよも不足と言なりての漏聞えしを
以て思知まいの彼湛海ハ殊ニ父と睦しき人なりざも。然れどハ思もよらず

量に妻が秘書を見せ参りしを洩聞て。斯悪ミあふと覚えり此上ハ何
国へも落延て難を避まんと洞なからに言ひしかども。御曹子打笑たまひ
賢しくも察しけるかな我もさるて知られ去ながら。彼湛海如何なる
呼嘆の者なりとも。討取んと風の紅葉を散すよりもいと安し必ず
彼が首を提て皈来ん。さまで師亦奈何なる謀を設け我を害せん
と計るんも知がたしされバ。皆く姿を隠しあれ御身の真心を知て我實
名を今顕し参らせん吾こそ左馬頭義朝が末子。九郎義経といふものゝ
頼て鬱憤の旗を飜し。平家を追討して世に出御身と永くそひ参ら
せんいかにとて人にも洩しのひそと語れバ。姫斜ならず驚きさまでも社
由ある君とハ見奉りされ必ず御詞の末違させなふなとゝ。尚細くと御
契約有て。御曹子ハ五條へて出行たまひぬ

白河湛海宿所之條

頃ハ十二月廿七日の夜なるが。御曹子ハ湛海が首取て。法眼に見せんと。白
綾の小袖引重ね。精好の大口に唐織の直垂。敷妙の腹巻志め。例の薄
緑の太刀佩たまひ五條の天神へ参詣したまひ何卒湛海を支故なく討
せたまへと御祈念終り。辺を見まへしも怪しき者も見えざれバ。扨ハいまだ
早かりけりとて。年経る樹の大木の枝葉茂りて木蔭暗き所に立隠
て。疾来よかしと待たまふ。茲に湛海ハ彼若人を討取んと心利たる門弟五
六人に腹巻させて前後に歩ませ其身ハ渇布の直垂に藤縄目の腹
巻して。黄物造の太刀佩てかりし。茅に柄鞘推包し刀をまとへとさし
て長刀の鞘をはづし。真中取て小脇に掻込五十日とらぬ髭鬚かおに
鉢巻しめたり。六尺四五寸の大兵なれバ。雲霞如くに見えて有ける。湛海頓
て五條の天神に詣し。神前に額附て願ひけるハ彼小男を左右なく斬せ
たまへと祈念しけり。御曹子木蔭より是を御覧し。飛出て斬たやと

白河の湛海最期の圖

思召ども流石に神前を汚さんも恐有とて潜に社内を出て下向乃道に待たまふ。湛海ハ社内を其許此許と尋ぬれど似たる者もなかれバ社僧に向ひ箇様ゝゝの小男ハ参りしかと問に半時余り以前に参られ疾下向ありと答へぬ。招を延引して討洩したるよと心焦立定めし法眼が方へ帰つらめ。追かけて討取やと舞つて閙しく社内を走出今出川さしてぞ馳んとする。小道の傍なる木蔭より御曹子立出たまひ如何に湛海。吾茲に在て待事久し。疾首さし伸て観念せよとぞ曰ける。湛海大いに悦び討漏せしと思ひしに渠躬名乗出しハ己と火に入夏虫に比しく宿運既に盡期なり。是併ながら神明の加護によるならんと呵々と笑ひ人も多きに白川の湛海が手にかゝるハ日本一の果報者なるぞ。一太刀にハ足ぬ者なれど名乗出しが健気さに長刀に乗せて得させんと言侭に社の侍長刀水車の如く廻しつゝ力足踏て踏鳴し斬てかゝるに御曹子

薄緑の太刀抜持し静に向ひ合せ丁々ちやうと打合すに湛海ハ唯一討と思の外其早業に心臆しけるか眼を眩て斬立しに何とかしけん長刀をもつしと蹴上られ吾も吾もと二足三足立退所を御曹子透早く使つと倚て湛海が首水も溜らず撃落し給ふ。湛海が門弟ども此早業を見て大に恐怖しさしもの湛海すら如斯我徒何ぞ及ぶべきと散々に逃行を憎き奴原一人も余すまじと追かけ追詰二人迄斬伏給ふ。残四人ハ雲霞に逃のびて。手に命を助かりたり。御曹子ハ三役の首を提て徐々と法眼が邸へ帰り給ふに門を鎖し橋を引たり迚も案内すとも開まじき事を察し給ひ一丈余の堀をひらりと飛越八尺ばかりの高塀を身を翻して刎越給ふハ真に小鳥なんどの戯る如くにぞ見えたまひける。御曹子ハ奥に入て窺ひ給ふに侍どもハ不残熟睡して鼾の音所々に[illegible]寂しと聞ゆれバ通りを忍て法眼が居間を差し覗[illegible]

ず。法華経の二巻が深く破け。北叟笑て獨言なりけるは。彼小童目が望し

たる六韜の兵書ハ竟も不得續人今や湛海が為に露の命を損らん

可憐しく／＼念佛西五遍唱ける。御曹子聞すへて。あら両悪や師弟の

孔が思ハずも舌根切下て／＼きえを申し思召ども。心を鎮て障子引開て

皈りハひぬし作たまで法眼御天一物も言得ず。御曹子ハ経机の上なる巻

物押やり。鮮血に染ける三役の首を並て置。御頼あそばし白河の湛海が首

兎に加勢の者の首二役討取い。尚四人ありけれども言甲斐なく逃行けれ

せ。其侭に打捨て。今ハ師の眼前の病癒ハひたる。契約にまかせて六韜三

略の御傳授に頭を抛て作ぎさしとの法眼顔色土の如く。茫然として

在しが。稍胸を鎮めて。いしくも討ひけるかな如何にも傳授となれども

朝庭より預奉る秘書なれば私にハ叶がたし奏問やて後に兎も角もせ

んおぼしめせと聞へける。御曹子完爾と打笑ひ。童さくなりて

預めしく。優くし起て廣庭へ下立塀も堀をもなく越て山科へぞかへり

玉ひけるハ法眼此躰を窺ひみて。実に腕に湛海を討取しも理なり是

凡人ならず。天魔の変化かと嗟嘆して止にけり

武藏房辨慶由緒之條

且說其頃洛中に緋細なる天狗法師と異名せる者あり。原来叡岳の

西塔にて厳してハ實名を武藏坊辨慶とぞ名乗ける。僧其景普を

尋るに天津兒屋根命の苗裔中関白道隆卿の後胤熊野の別當弁正

か嫡子なく幼名を鬼若と呼まゐらする者なりけり。是が由緒を探るに往日二

位大納言某卿とや御男子殺を持玉ひしが。宿因の然らしむる所にや。皆世

を早うしのひらべ。御悲歎の泪乾く時なく。此上ハ神明佛陀の御加護

にあらずまでハ覚束しと。熊野三所権現に祈願をぞ籠ひしに。其験に

や。齢長て一人の姫君を設玉ひけり。御両親の御悦大方ならず。寂

大切に育めしが生長に随ひ美貌天下に無雙美人なく渡せしかバ
彼竹取の翁が得てし赫夜姫の如く傳つ。御寵愛斜ならず。されバ
月卿雲客乃公達其佳色に泥で我もくと望すへども。大納言更に許し
玉ハず。然るに右大臣師長卿偶に乞望玉ひしかバ。已事を不得許諾有と
雖其年ハ東方ハ忌事あるまで。婚儀ハ明年乃事と約定ありける。扨
姫君深き宿願有とて。五條天神へ御参籠有けるに。其の夜より俄に寒
風吹来り。姫君の御身に中と等く。忽ち物狂しく成のすひしかバ。大きに
驚き御殿へ伴ひ歸り。其由言上なりしに。大納言以の外に驚き騒ぎ玉ひ
典薬頭を召まで醫療手を盡しまへども。露許の験もなかりしかバ。陰陽
頭に占せのに。是佛神の御祟なりとや。扨ハ熊野權現に祈誓して
浩ひ美人を授ヶ奉りしなれバ。姫君をまで三熊野へ参詣させ奉
らバ御咎なかるめしと。とりくなりしより。俄に熊野へ御代参を立させらる

病氣平癒させ玉ひバ。姫を三熊野へ参詣させ。神恩を謝し奉らせ。緒の法
施を奉らんと中させ玉ひしかバ。權現も納受させ玉ひけん。日を追て物狂
御平癒せさせ玉ひける。御両親ハ言もさらなり。師長卿も深く御喜悦有
て。則姫君を熊野へ参せ奉らんと。行粧善美を盡し。都を啓行ありて
右大臣師長卿よりも百余人の雑式を副られける。斯て道中恙なく熊
野へ着せ玉ひて。緒乃法楽法施を捧げ。姫君にハ本宮乃清浄殿に
て御通夜ありせらる。然に當山の別當奉正も祈の事有て内陣へ
入けるに。圖ある燈乃影に姫君の容顔艶麗なるを見まゐらせしより
も行徳高き身ながらも忽ち煩悩心萌し。世にも浩ひ美人の在けるよと
恍惚として見惚しが。今ハ中く邪念禁しがたく。急ぎ下山して大衆を
集へ今内陣に参籠しまゐ姫君ハ何なる御方乃御息女ぞとて問ふに
一人が曰く。彼社二位大納言乃姫君にて。右大臣師長卿の北乃方に定まり

のへるやくゆとて答へける。別当聞て。彼姫右大臣と婚儀の御契約を
有ながら未だ入輿有しといふにもあらず。吾彼姫を懸想して戀慕の
念胸を焦せり。別当が思ひ人若大衆達よ。路次に埋伏して。彼姫を奪
捕て吾に得させよへと言にぞ。大衆大きに驚き。人も人に社よれ一山の
別当職たる人の。殊に年老て斯る不法の事を仰出さるゝ事。天魔の
所為か外道の障碍か。彼姫を奪捕ば朝廷の御咲怒に觸。別当は言もさ
らなり。一山の安否如何あらんも知がたし。此義を思止まり給へと。口毎に諫
言ども。別当中々諫に不従よや仏敵朝敵となるともかまはぬ己が命
にかへても彼姫を奪では不止。よし朝廷より征兵を差向らるゝ事あらば
斬歿せんまでの事更に変ずまじき躰なれば。逸雄の若大衆等争ふて往に
思待なるに。他の若大衆は難を避んとするも。手に手の好みなるに似たる
暗に京勢攻来ば。一山の衆徒の手並を幾度も退ぞ立んと前後は

思慮にも及ばず。我もくしと鎧一縮して。得物〳〵を追取。足溜よしか
に埋伏し。今や来ると待うけたり。姫の方様の人々は斯る事とはゆめ
にも不知。姫を輿にのせ奉り。發言固して下山まする所に。思もよらぬ左の
傍より。若大衆ども蒐り出無二無三に従者輿丁を撃散し。難なく姫
を奪ひ別当の坊へつれ行て渡しければ。別当大いに悦び一室に窗を
く。番人多勢に守らせたり。姫に従ひし青侍雑式は大いに騒ぎ。恥を知
たる者は討死し。臆病なる者は京へ逃皈り事の次第を弥うまで二位殿右
大臣殿にも。斎を噬りて大いに憤りをひ朝廷へ訴へれば。帝にも其狼藉を深
く悪ませ給ひ別当が罪を糺よとの宣旨を賜り。二位大納言右大臣との
を大将とし。河内和泉伊賀伊勢の兵七千余騎給ひ。熊野へ發向させ
めらる。此事熊野へ聞えければ。兼て期したる若大衆に手五百騎
切部王子山に出張して。一簇射んとぞ待うけたり。官軍程なく押寄て

頻く箭合し。喊を造く攻立ける。さまされども衆徒ハ切所を前に當てまし
ぞ防しも恐まず。矢頂を乃んを為し散くに射まくらませ疼む所を撥て
下呈首よりかへつて退落す程に。官軍若干射まて引退ぬ是より合戦
數度に及べども或ハ勝或ハ敗しく墓〻しき勝負もなく日を過しけ
るこそ斯てある果じと都へ早馬を馳し。加勢を乞事頻なり朝廷にハ此由
商議有く。別當の狼藉其罪輕からずと雖。唯此義に就て熊野一山を
亡さんハ權現の冥慮乃程も恐あり。何卒一旦の罪を宥られ双方和睦
あるまかし。原来彼別當ハ天津児屋根命乃苗孫中関白道隆の末葉
なまとぞ。二位大納言乃聟となすとも愧しからず。右大臣にハ先立て内〻
まるる。平宰相信成の娘。無隻國色なまこバ是を賜りて師長も遺恨に
かるんとの僉議有けるに此議然るべしとて早馬を馳し。熊野にもせ
二卿の方へ右の旨や渡し。大衆の方へも仰有ければ。大衆ハ原来婚を

戦ひなまだも。倫命厚よし須臾ニ卿も不本意に思ども朝廷の御計なれ
乃上なれバともかく已事を不得承伏有ければ。強動忽ち鎮て衆徒も彼
衣を飾で事を上洛しけれバ。別當大に悦び京都へ登て朝恩を謝し
改て二位殿の聟となられけれど。扨も似合しからぬ婚姻かなと世人腹を
抱て笑ひ誘ども別當ハ耳にもかけず。且暮姫が傍を放まず引睦れける
小姫も意に八添ねども。終に唯ならぬ身と成ければ。別當悦び
譬ふ物なく。六十一歳にして初て子を儲る事の嬉しさよ男子ならバ
佛法の祖を継せんと。出誕の日を待まちける。定の月にも産まずして
一月後まだ一月後まで遂に十八月目に出産しけるが。殊に大難産にて。姫ハ
苦痛に堪ずして。産所の裡に空しく成ぬ。別當此由を聞て悲歎限り
なく。昔漢李夫人に別れし漢帝の悲しみ。揚貴妃を亡し唐王の歎きもいま
我身の上となりけり。老の後に得たる。然るにさへも産れし者を如何なる

鬼若丸乱行乃圖

どもと同じ。其形三歳許りの小児の如くにて。産れながら能歩き。髪ハ肩の隠るゝ許生ひ奥歯向歯悉くはえ。色飽迄赤くして。獄卒にも異ならず。別當大いに驚き是鬼子なり。かゝる者を育なバ。佛法の仇とや成なん。深山の奥深く底にも捨よ。見るも忌はしとて怒る。茲に山井三位と申せし卿の北の方ハ辨正が妹にて。産婦をいたはらんと熊野へ下り居られしが。此由を聞て深く憐み。辨正を諫めたまひけるハ。出誕の児異形なるを憎みて。捨たまはんとの御憤り理有に似侍れども。親となり子と産るゝも宿世の因縁ふかく侍べることなれバ失ひたまはんハ後世の御為も悪るべし。凡世に形の醜き者もさる多く侍り。月を孕みて産れし人も少からず。釈迦ハ摩耶夫人の腹に三年迄妊られたまひ生れながらに歩みたまひしとかや。又の老子ハ八十年が間胎内に在りて。産れ出し時髪皆白髪なりしとぞ。にも書傳へ侍れば十八月を経ての姙とも申べし。捨ると思ひて妾に賜はりれ。京へ倶して我も亦人となしなバ。三位殿の世継ともし。若心荒くしくバ法師ともなし。経の一巻をも読習せ侍らバ。母姫君の菩提彼児の佛果の縁とも成侍らめと。搔口説歎きたまひければ。辨正兎も角もとて許容しけるにぞ。悦びて乳母と倶に京へぞ伴ひ給ひけり

鬼若乱行　並　剃髪改名之條

扨も山井殿の北の方ハ。別當が児を乞得て都へ倶し。三位殿にも一五一十と語て聴ければ。養育ありけるに。実に光陰の停ざる事。奔箭流水のごとく。彼児早五才になりけるが。自余の児の十三四許に見へ。六歳といふ夏甚重き疱瘡を病て。其跡菊目石の如く。色も黒くなり。髪も赤黒く肩過る迄生たれば。倍鬼の如くなるにぞ。誰が号ともなく鬼若とぞ呼れける。三位殿ハ是程悪さげに生立なバ。思ひきりて。囲呆ものハ迚も人の体なき者に成なんと思されしが。法師にせんに不如とて叡山の学頭西塔の観

慶阿闍梨の方へ登し。此兒形こそ媿悪けれども。心ハ正路なる者ふハあらねバ。御徒弟となし。経綸の端なれも弁へさせ。萬一心悪黨ならバ。如何ようにも折鑑を加へ玉へ。たとひ折鑑の策に命を失ひ候ふとも苦からずと。懇に頼み遣しぬれバ。阿闍梨も不便に思ひ承引有て。膝下に置手跡素讀なんど学ばせらるゝに。思ひしよりハ智才有て。手跡も素讀も余乃兒よりも早く上達し。三四年が間に学業抜群に進み。歴々の僧徒も経綸の理解に及びてハ鬼若に不及こと多ければ。一山の衆徒驚嘆し。人々形の美悪によらざりきと賞美するにぞ。師の坊も末頼母しく思ハれ。益心を入て教導あるに。鬼若漸く勤学に倦。よりく兒小法師などかたらひ。人も通ハざる御堂の後の山奥へ伴ひ行。腕押首引捔僕力持なんど。種々の悪擬をなし。元来天性の強力なれバ。誰々も鬼若に勝る者なかれバ。世に面白き事に思ひ大勢を對人にして。種々の力競をなし。撃倒し踏のめしく。痛めく者少からず。衆徒此事を聞て大に怒り。鬼若己が悪擬するのみならず。他人の勤学を妨げ剰へ疵付る事さへ奇怪なりとて。観慶阿闍梨の許へ。鬼若が悪行を訴る事引もきらず。阿闍梨殆どもてあまし。鬼若を度々叱懲し折鑑せられけれバ。師の前にてハ屈伏の躰をなし。其告来りし者を敵のごとく怨み怒り。矢庭に其者の房へ走り込。門戸樟子の嫌ひなく。拳を固て散々に撃破り。或ハまゆる者を打擲し。狼藉法に過ぎりしかバ。衆徒益怒り憤り。鬼若を撃倒さんとすれども。彼が力量に及ぶ者なし。却て手痛目にあひければ。唯對手になるをさけ。路次にて行合ても不知顔にて脇道へさけかバ。疫病神の如く忌悪なる。鬼若ますく是を胸悪く思ひ。端なく行逢時ハ取て抑へ。先日より逢ずありしに。見ぬ形にて脇道へ避るハ何の遺恨にてやなんど。絶て間果ハ散々撃のめしければ。衆徒集會し。両塔の衆議一と日を積て悪行増長し。言語道断の挙動譬るに物なし。彼ハ熊野の

別當が子ふて。養父ハ山井殿祖父ハ二位大納言殿師匠ハ當山乃学頭ふて。人並よりも寄有者なれバ。不見顔して咎めざるふ今ハ如何ある不法をなさんも量がし。所詮衆徒一黨より。觀慶阿闍梨ふ頼へ鬼若を退出さ。左なくバ禁獄せんハ如何ふと議したり。衆徒皆忌憚なれバ。一議ふも及ず。是社願所なりと。列坐兼伏なしたまふより。即克連印の訴状を認め阿闍梨の許へさし出したまむ。大衣ふ氣毒ふ思ハれ衆徒をまねき種々と諂言し。彼者の狼藉ハ此方ふもよくおぼえけれど山井殿より個乃御意を添らまされば。追さんも如何と。今日迄默止ぬ。此上ハ禁足申付をし用ひざれば。其時追出しける。是迄ハ愚老ふ免じ救されんへと侘るふぞ衆徒も領掌しく引とりぬ。觀慶阿闍梨鬼若ふ彼訴状を見せ散々ふ叱り愧しめ。以後ハ禁足たる旨しく。一間所ふ押篭敢て出しおハざりしうむ。鬼若大ふ困果是皆衆徒原が所為なりきむ。如何ふもしく讐を報んと。一夜潜ふ一間を忍び出塀を越て外の方へ出。てらの播木を引抜坊くの門戸を撃碎き践破て狂ひまきむ。大衆大いふ驚き怖ぎ須彼鬼若めが荒出しぞ。近付く惨ひなし。唯逃隱て為が侭ふ打捨おき誰出合ものもなかれば。鬼若ハ思まゝふ狂ひ廻り。あら心地よやとく已が房へ歸しが。今も師匠も此山ふハ置まハしと思ひ。美作の律師といふ人乃湯殿ふ走り。有合剃刀とらつく。みぞから頭剃囬し。傍ふ掛る古衣著して。水鏡ふ影を写しみん。天晴ゑるなからよき法師よ。うらあとたありて鬼若ふくハ吁まじ。我名を何と言まゝしと思ひけるが。吃と心付昔此山ふ武藏といへる荒法師ありしく。放逸ふ舉動けるが。六十一歳の天壽を保ち端坐合掌して大往生乃素懐を遂しと聞。吾も佛縁あらむ。斯法師となる成たんめり。彼武藏が跡を追て。武藏房と名乗。又辨正の緣の字と。師匠觀慶の慶乃字を用て。辨慶とぞ名乗ましく。別り

戒所も頼だ往已と己が戒師となり生年十七歳にして住刹し西塔を立出小原の別所として山法師の住捨たる荒坊に雖しとむるとなく住居なり。観慶阿闍黎風に此由聞のへども彼が出行し八一山の幸ひなりとして不知顔にて棄置けるなれ

義経勲功圖前編巻之二畢